

阿部先生の思い出

中 根 隆 行

私が阿部先生とはじめてお会いしたのは1995年の春のことです。大学院に入学後、先生にご指導していただくことになり、斉藤愛さんと一緒に研究室へお伺いしたのが最初だったかと記憶しています。指折り数えるともう8年前のことになります。

大学院から筑波に来た私は、入学当初は勝手もわからず、大学院が何をすることであるのかさえ自覚していなかったという体たらくでしたので、先生には公私ともども大変ご迷惑をおかけいたしました。その頃、私が先生のもとを訪ねるのは決まって先生の講義のある金曜日でしたが、自分の口から「論文」や「研究」という言葉が出ない私に、いつも「君、ねえ」と発破をかけてくださいました。そんなことが昨日のこのように感じられます。

数ある先生との思い出のなかで、いまでも鮮明に覚えているのは、1997年6月に山形大学で開催された日本比較文学学会全国大会でのある出来事です。私にとっては初めての学会発表だったのですが、不勉強な人間の常、前日に徹夜してようやく発表原稿を書き上げた疲れから、発表を翌日にひかえたその夜は潔く早く寝ようと心に決めたときのことでした。同じホテルの別室にいらっしゃる先生から発表原稿を持って部屋に来るようという旨のお電話をいただいたのです。

突然の電話に戸惑いつつも取り急ぎ先生のお部屋に伺うと、先生は浴衣姿で「明日の発表の予行練習をしましょう。君の声は聞き取りにくいから、はっきりと、大きな声でね」と仰いました。それから小一時間ばかり、先生は、内容はすでにご存じのはずの私の発表に耳を傾け、コメントを付け加えてくださいました。こう書くと微笑ましい昔日のひとコマに思われるかもしれませんが、要するに当時の私は、発表を聞く人や論文を読む人の存在をあまり意識していなかったのです。自分の部屋に戻ったあと、私が再度音読し直し原稿に手を入れたことはいうまでもありません。

先生にご指導していただいた筑波大学での6年間、私は先生からいろいろなことを学びました。その頃の私のテーマは「朝鮮表象」でしたが、明治期後半の小説と

「無用者」と訳されたルージン像の移植の関係や、日韓併合期の徳富蘇峰・蘆花兄弟のポジションなどの専門的なアドバイスから日本語表現のイロハにいたるまで、さまざまなことを学びました。いま考えるとあれもこれも思い出しますが、先生のお人柄でしょうか、当時のごく自然に先生のひと言ひと言を私なりに咀嚼していたことに気づきます。

このたび阿部先生が筑波大学を退官されることになり、もう先生の研究室へご挨拶に伺えないのかと思うと寂しい気持ちがいたします。在学中はもとより修了後も、先生にはいろいろとご心配をおかけいたしました。本当に感謝しております。末筆ではありますが、先生のご健康と今後ますますのご発展を祈りつつ、心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。